

市史編さん便り

第12号 2020年9月15日(火)発行
土佐清水市教育委員会生涯学習課
市史編さん室

◎第2回土佐清水市史編集委員会の日程調整について

猛暑がようやく一息したかと思えば、台風や突発的豪雨により天候不順が続きました。気がつけば早、秋になっています。皆様には体調などお変わりはありませんか。季節の変わり目です。ご健康には十分ご留意いただき、ご自愛ください。

さて、来月、本年度「第2回目の市史編集委員会」を実施したいと思います。

日程は、10月26日(月)～30日(金)の期間で15～17時の時間帯に開催を予定しております。

そこで皆様の日程調整をさせていただきたく、この期間でご都合の悪い日を別紙の調整表の欄に×印を記入し、同封した封筒にて市史編さん室までご送付いただくか、下記までメールもしくはファックスにてご返信ください。閉めきりは9月24日(木)必着とします。よろしく願いいたします。

第2回土佐清水市史編集委員会・日程調整表

編集委員氏名:

氏名	曜日	調整内容	備考
伊藤 誠	月		
27日	火		
28日	水		
29日	木		
30日	金		

通信欄

【送付先】〒787-0392 土佐清水市天神町11番2号
土佐清水市教育委員会生涯学習課市史編さん室・田村 宛
【メール】tamura_kimitoshi@city.tosashimizu.lg.jp
【FAX】0880-87-9132

【発行所】〒787-0392 土佐清水市天神町11番2号

(送付先) 〒787-0392 土佐清水市天神町11番2号
土佐清水市教育委員会生涯学習課市史編さん室・田村 宛
(メール) tamura_kimitoshi@city.tosashimizu.lg.jp
(FAX) 0880-87-9132

「市史執筆のブレイクタイム(9)」土佐のカツオー本釣り

近世・中浜浦を拠点とした山城屋は鼻前帯を牛耳り、地先でのカツオ漁・節加工を通じてそのオリジナル商品である「春日節」を江戸や上方に流通させ、当時最高品質であった「春日節」とともにその隆盛を誇った。明治終わりから大正中期にかけて動力船が導入され、山城屋の隆盛も終焉し、地先でのカツオ漁から春は鹿児島県山川港を拠点にトカラ列島、あるいは五島列島、静岡県下田や焼津を拠点に伊豆諸島や小笠原諸島、あるいは三陸沖へとカツオを追って移動する沖合い漁業や遠洋漁業に大正末期から徐々に漁獲方法が転換されていった。動力船と製氷技術の向上がその背景にあった。

私の同級生2名も中学を卒業し、土佐清水港からカツオー本釣り漁船に乗船した。昔は春先に新しくカツオ漁師となり、巣立ちする卒業生(新米カツオ漁師)を港岸壁で家族や同級生が見送る光景をよく見かけたものだ。現在はそのような光景を見るのがほとんどなくなった。私は昭和40年生まれである。カツオ漁師への就職が花盛りだったのは私たちの世代以前の先輩方である。今回は昭和初めから昭和50年代までの漁業が遠洋漁業に転換され、それが主流になった時代のエピソードを2例紹介する。

“遠洋漁業の基地「伊豆下田」と「土佐カツ衆」”

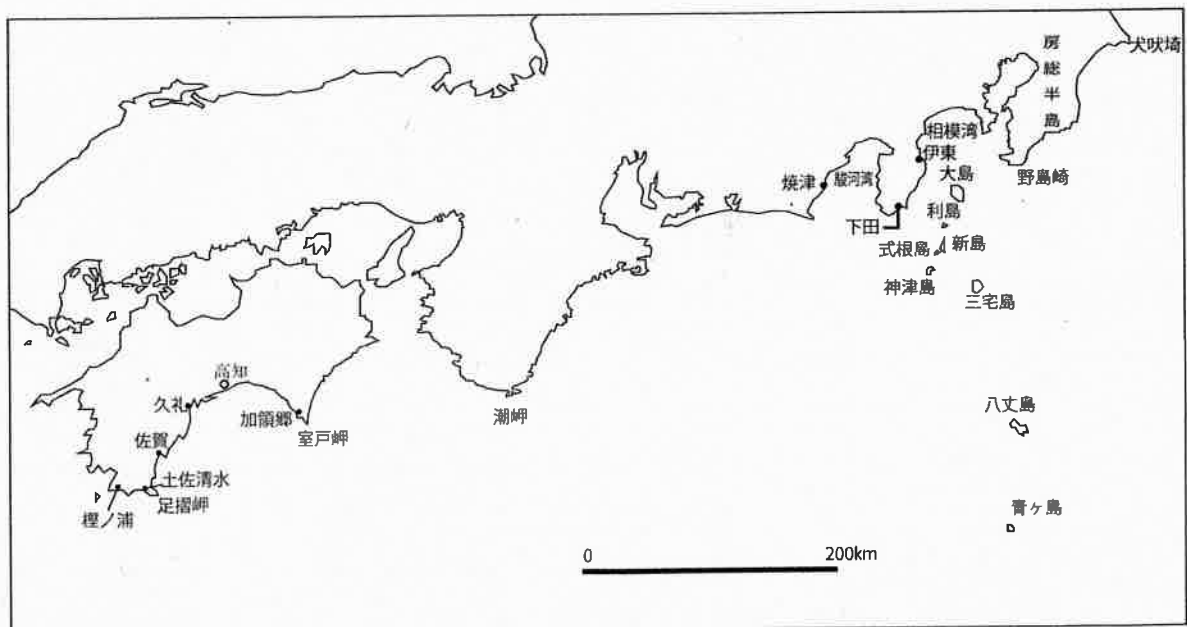
春になり、黒潮に乗りカツオが北上する。このカツオを「上カツオ」と呼ぶ。秋になり三陸沖から逆に南に下る。これを「下りカツオ」と呼ぶ。春になりカツオは、黒潮に乗りトカラ列島や足摺岬沖合に回遊し、4月から5月に伊豆諸島から外房沖に移り、夏から秋にかけて三陸沖に北上する。そのカツオを追って、一本釣りをを行うのが、カツオ漁師である。

高知県から遠方に出漁するときに土佐カツオ船は、その要所となる港を基地とした。伊豆諸島方面への出漁に際しては、昭和初期から太平洋戦争を挟み昭和50年代頃まで下田港をその基地とした。下田は、寛政年間に大番所が置かれ、幕府治安維持の要衝の地であった。また、近世から明治中期にかけての和船の時代、「風待ち港」として、江戸と京大阪つなぐ結節地であり、一大貨物輸送航路の要所として発展してきた。稲生沢川河口の山に抱かれた溺れ谷で、湾外の神子元島周辺には大小の暗礁が多く、波浪を防ぐには良好な港であった。反面、湾外の暗礁の多さから、難所の一つでもあった。現在の静岡県下田市は、昭和46年(1971)に市制が施行された。その前身は下田町であり、下田町・稲梓村・稲生沢村・白浜村・浜崎村・朝日村の六町村が昭和30年(1955)に合併して誕生した。

昭和8年(1933)、下田港に「土佐出漁船組合」が結成された。昭和の初めより昭和50年代頃まで下田を拠点にして、伊豆諸島や小笠原諸島周辺で高知県の各浦船籍カツオ船が操業した。昭和の初めより太平洋戦争頃までを土佐カツオ漁師の下田進出第一期、その後、戦後から昭和50年代頃までを第二期と捉えることができよう。彼らは下田港を起点に、大島・新島・利島・神津島・三宅島の周辺海域を「陸(おか)」、これよりも100kmほど南の八丈島・青ヶ島を「沖(おき)」と呼んで操業し、カツオ一本釣り漁に勤しんだ。

戦後、高知県のカツオ漁が復活し、高知県の加領郷・宇佐・土佐清水・大月町檜ノ浦の船主が下田に常住し、事務所を開設した。また、出漁中のみ下田に滞在する船主もいた。焼津には土佐佐賀、伊東には久礼の船主の事務所が置かれた。土佐カツオ漁師の下田進出第二期の到来である。

昭和30年代には、下田河岸通りには、土佐カツオ船団船主や船宿関係の家屋が並んだ。ここには、明神丸・中村弁吉、広漁丸・大西勇市、広栄丸・西岡弘一、豊漁丸・安岡某、文盛丸・川崎重信、源漁丸・大西源吉(後に第28 琵琶丸の船主となる)ら船主の屋敷7軒と船宿関係の家10軒などが並んだ。このためこの界隈を地元下田の人々は「土佐町」と呼んだ。昭和37年(1962)10月、「土佐出漁船組合」が結成された。この組合に所属する漁船団を下田住民は、総称して「土佐カツオ漁船団」、略称「土



資料1 土佐カツ衆操業位置図

佐カツ衆」と呼んだ。安芸郡奈半利町加領郷・土佐市宇佐町宇佐・高岡郡中土佐町久礼・幡多郡佐賀町佐賀・土佐清水市らの船籍のカツオ船がこれに該当した。

下田では、船宿を「イサバ」と呼び、このイサバが土佐カツ衆などの旅船の世話をしてきた。下田では、地元在籍漁船を「地船(ジブネ)」、他県の漁船を「旅船(タビブネ)」と区別した。イサバは旅船の世話をすることによりその収入を得ていた。

土佐カツ衆が操業するにあたり、餌や燃料・氷などの準備をこのイサバが代行して行う。これを「仕込み」と呼んだ。旅船は他県の船であるがゆえに現金を多額に持参していない。下田の街で物品を調達しようとしても信頼がなく、地元のイサバ屋号で物品を購入してもらった方が便利がよいからである。支払いは、港に水揚げした漁獲金から差し引かれた。イサバは仲買商としての権益も有していた。支払いできない場合は、次の水揚げまで支払いを融通したり、場合によっては分割払いということもあった。また、土佐カツ衆の中で病人が出たり、地元でトラブルにより警察沙汰で拘留されたときに、弁護士の手配も請け負った。いわば下田に滞在する期間は、身元引受人のような役割を担っていた。イサバは元々宿屋であるが、もっぱら宿屋に泊まるのは船頭などの幹部であり、船員は港に停泊中の船底に泊まった。イサバの行う職務は宿屋の機能以外、先ほど述べた「仕込み」を実施し、その物品を船に積み込むところまでを請け負った。これを「つなぎ」といった。このようにイサバは、下田住民と土佐カツ衆の間の取引や交流が円滑に進み、市場が成り立つようその緩衝的役割を担っていたのである。



資料2 大西家住宅(奈半利町加領郷)

“第28 琵琶丸遭難の悲劇”

この第28 琵琶丸遭難(これより後、「琵琶丸」と記述する。)についての記述は、『旧土佐清水市史』では触れられていない。おそらく、この船籍が高知県東部の安芸郡奈半利町加領郷であることから記載されなかったと思われる。しかし、このカツオ船には、土佐清水市の足摺半島域出身の乗組員がほとんどであり、出港したのも現在の土佐清水港市場西岸壁であった。この点で極めて土佐清水市との関係が深く、この機会にその概要を記載しておきたい。なお、これらの詳細については、元土佐清水市観光協会副会長で、長年カツオ船に乗り、通信長を勤めた植杉康英氏の著書からその概要を引用した。

昭和50年代後半以降、熱帯域において大型巻き網船による巻き網漁業が増加し、それ以降、カツオ一本釣り漁船は年々減少している。戦後、高知県東部では、室戸と奈半利町がカツオ漁やマグロ延縄漁が盛んであった。特に、室戸港所属の大型マグロ延縄船が増加し、カツオ漁師もマグロ延縄船に乗るような傾向が顕著になってきた。安芸郡奈半利町加領郷のカツオ船もその乗員をマグロ延縄船に奪われ、人員が手薄になっていた。これを補う目的で土佐清水市、特に地先でカツオ漁を行い、その技術が高く、実直な人柄の漁師が多かった鼻前浦々(足摺半島西南部)の漁師にその人材を求めた。

琵琶丸は、昭和25年(1950)、高知市中之島造船所で建造された。先に建造された第七広漁丸の建造に時間がかかり、長い建造期間を要した。このことが後のこの船の遭難に少なからず影を落としている。船主は、当時現職で県会議員であった大西源吉(1894年生まれ)、彼の加領郷にある居宅は、昭和10年に建築され、二階建ての土蔵風建物の下層に蔵を設けて、実質三階建ての建物であった。平成15年(2003)、その居宅は登録有形文化財に指定されている。漁労長(船頭)は東谷仙松(1905—1950・中浜出身)、船長は川田敏幸(1926—1950・香川県綾歌郡綾川町出身)であった。

進水式を経て、いよいよ航海に船出したのが、土佐清水港市場西岸壁であり、昭和25年(1950)8月初旬のことであった。その後、琵琶丸は、静岡県下田港に停泊し、釣り竿づくりや食料・氷などを調達し、仕込みを行った。氷板100枚15トン、飲料水5トン、燃料10トン、米麦を中心とする食料15

トンを生入れた。8月13日、初出漁で下田港を出港し、三日間で2.25トンのカツオを下田港に水揚げした。二回目は千葉県犬吠埼沖合など計3回の出漁航海を行った。建造の遅れから操業時期が遅れたことから漁労長は、それを挽回しようと必死であった。そして、静岡県焼津港に入港したときには、早10月になっていた。秋も深まり、次第に乗組員の郷愁の念が強くなっていった。漁労長の判断で10月24日に高知港に入港した。そこで船主大西源吉の判断を仰いだが、造船の遅れで漁期が大幅に少なく、期待していた水揚げにも達していなかったことから、今一度出漁するよう命じられた。このことが後の不運につながっていくこととなる。

10月26日再び下田港に戻り、三宅島周辺で出漁した。10月30日に一旦、下田港で水揚げし、再び八丈島や青ヶ島周辺の沖合で操業しようと出漁している途中、大型台風「ルビー」に三宅島沖合で遭遇した。この台風は、10月27日にカロリン諸島中部（ミクロネシアやパラオ）で発生し、940ヘクトパスカル、暴風圏内の風速は25～30メートル、中心付近の最大風速は50メートルであった（当時の気象庁発表）。10月31日、台風は八丈島付近を通過し、房総半島沖から三陸沖へ向かっていた。

このとき、琵琶丸は、三宅島沖を航行中であつた。風雨とうねりの中、三宅島の軍艦鼻周辺に避難した。岸边に近づくほど小型船が占領しており、66トンの琵琶丸はその船体を持て余した。避難船が舳めき合う三宅島南岸で漫然と待避するより、下田港や駿河湾に待避した方が安全だと考えたのか。他の避難船の舳めき合う軍艦鼻周辺の砂浜・鯖ヶ浜東岸に錨を降ろしたが掛かりが悪く、ここでは待避できないという見通しがあつたのか。この後、東谷漁労長は、下田港や場合によっては駿河湾に避難するという大きな決断を下した。もしかしたら、このとき錨がビシッと止まってさえいれば台風の真っ只中を航行するという危険な決断に至らなかつたのかもしれない。植杉氏は、著書の中で、漁労長を含めた多くの乗組員が早く郷里に帰りたいとの望郷の念が、操業において焦りを生じさせ、正確な状況判断を鈍らせたのではないかと洞察している。植杉氏自身が16年間カツオ船に乗り、通信長として勤めた経験から考察した部分である。おそらく、その考察は正しいのではないと思われる。

三宅島を右に見ながら台風の中、航行を続けた琵琶丸は、神津島から3.9キロメートル沖合の恩馬セ島周辺の小岩に座礁し、ついに力尽いた。濃い霧と風雨のため視界が悪く、海水で船が進水し、舵が効かないブローチング現象が生じていたと思われる。

参考・引用文献

野地恒有「伊豆半島下田港のカツオ漁とトサカツ衆―出漁漁民の移住と在来村落の関係―」（『愛知教育大学研究報告 47（人文・社会科学編）』愛知教育大学、1998年、55―63頁）

植杉康英『土佐カツオ漁業衰史 琵琶丸の悲劇と土佐漁師』株式会社飛鳥、2018年。

【編集後記】

執筆予定表の進行状況は、いかがでしょうか。それぞれ7月までにご提出いただいたご自分の執筆予定表を今一度ご確認いただき、執筆に奮起いただければと思います。第2回市史編集委員会では、その進捗状況について発表していただきます。よろしく願いいたします。

（田村）